

人も、一貝を一ケ年に付るも有、二年三年に付るも有、夫をさへ伽羅の油付る人をば笑ひそしる、去により前髪の若衆は多く附る分にて、大形一貝を二ケ月程に付切、或人の子息十五六歳の若衆、一ケ月に一貝付切とて取沙汰せし程なり、油を多く付て髪の結やう見事成は、油のかけ成べしと笑ふ故、多く付る人なかりし、今は大き成員に一ツを二三度に付切故、伽羅油賣所多し、女中猶以付る、

〔翁草五〕伽羅の油昔は藥種屋にて商ひ、男の髪ばかりに少しつけ、女はさねかづらといふ物にて、日にく、梳けるゆゑ、臭氣もいせず、奇麗なりしに、四五十年文頃以來、男女ともに頻りに油を用ひ、元結も以前は貴賤とも紙縷にてすましけるを、今の風俗になるに、またかび、油元結の店も、次第次第に出来たり、

〔歴世女裝考四〕塗髻膏の沿革

おのれ百樹○岩瀬が茶友に、藥店の隠居宗香とて、天保元年に行年八十七歳の翁にて、頗好事もありけるゆゑ、藥種屋にて伽羅の油を賣りしといふよしき、つたへありやと問ければ、翁いはく、吾家は倅にて四代藥種屋なり、吾父は寶永二年の生れにて、七十七にて、天明元年に没せり、吾若年の比、父が語りしは、今伽羅の油とて一ツの家業となりしが、元來は我が店にても賣たる物なりとき、其はじめは、或武家の中間、松脂と地蠟とを度々買ひにこられしゆゑ、なにの藥につかひ玉ふと尋ければ、これをとらかして、部屋のものらがびん付油につかふのなりといひしが、そののち匂ひをすこしいれて、伽羅の油と名付、藥種屋仲間に賣るものありしゆゑ、わがみせにてもうりたるに、よくもうれざりしよし、そののち香具屋にて上製の油をうりはじめ、藥種屋のはすたりたりと父がはなしなり、藥種屋にてうりし物なるゆゑ、一兩目二兩目の名あり、今其名の残りしは、兩替町の下村ばかり也と、宗香かたりしは、天保元年の事なりき、亡兄醒齋翁所藏せられ